

世界の至宝を未来へ伝える陶板技術

陶芸学科 教野 弘孝

陶板美術との出会い

荘厳な音楽の中で、巨大なシスティーナ礼拝堂に足を踏み入れてその壮大さに思わず息を呑む。私は今、礼拝堂天井の大フレスコ画の下、巨大なミケランジェロの「最後の審判」壁画の前に立っている。いつか一度は、と願っていた徳島県鳴門市の「大塚国際美術館」にバスツアーで訪れたのは平成22年3月のことだった。

この美術館の展示物は全て本物では無い。しかし、ここで見る作品は古代から現代に至るまで教科書に載っているような極めて著名・重要なものばかり選出して‘陶器の板で’実物そのままに製作・展示しており、「どこかで見た」名作ばかりである。

過去に耕山寺、越前大仏、太陽公園、但馬大仏、ルーブル彫刻美術館、勝山城、佐和山遊園など私設のいわゆる‘コピーパーク’などにも興味本位で多く行っているが、この美術館の美術に向けた信念、情熱は全く訳が違い、その思想、本格さは全く一線を画している。

「世界中の美術品が一カ所で鑑賞できるように・・・」がそのコンセプトであり、ヨーロッパ旅行など夢のまた夢の自分にとって、ダビンチの「最後の晩餐」（修復前と修復後が再現）、「モナ・リザ」、ボッティチェリの「ビーナスの誕生」などを実物大で間近で見られる（触れることも可能）ことはうれしいことであり、将来本物を見てみようという希望も沸くのである。

大塚国際美術館

大塚グループが創立75周年記念事業として徳島県鳴門市に設立したこの美術館は、平成10年の開館当時は日本最大で広さは敷地面積7万平方メートル、地下5階・地上3階、鑑賞ルートは4kmに及ぶ。鳴門の美しい環境や景観を守るために、山をくりぬいて建設されたという変わった成り立ちを持つ。そして、展示作品は千点余り。世界の美術をレプリカした陶板名画美術館であり、全ての展示品は絵画はもちろん、遺跡・教会などの建築物さえも原寸大で‘陶板’で再現されている。

美術品を陶板でレプリカする意味とは

美術品は空気汚染、風水害や火災などの災害や光による経年劣化で、製作された当時から少しずつ変質していく。絵画なら紙・キャンバス生地・絵の具、建築物なら土壁・レンガなど素材の風化、変質など絶対避けられない事実であり、古代はもちろんルネッサンス時代の作品さえいつまで保存できるか危うい。どんなにすばらしい作品でもこれから何百年と存在するか分からない。地震など天災や国際情勢不安定から文明遺跡も破

壊されることもあり、それらを後世まで引き継ぐためにレプリカを作っておくことは意味がある。それでは、そのレプリカをどんな素材で製作するか？。結論として、美術品を色・表面感触・大きさなど本物そっくりに製作できるのは陶器の素材と精密な写真撮影技術と釉薬焼成技術である。

美術鑑賞と写真撮影と焼物体験

ろくろを見るのはレイ大に入学して初めてというほどの陶芸初心者だった私だが、実践授業での作陶・焼成体験、数々の陶芸の町・陶芸美術館の研修見学などから、焼物を見る目・興味が沸いてきたのが事実。そして、日本・世界の美術展覧会に頻繁に顔を出すほどのもともと美術好き。また、若いころから写真撮影が好きということ。実は、この3つの趣味を持つ自分が「美術品を陶板で再現」という驚異の技術に興味を持つのは当然のことだった。

大塚オーミ陶業株式会社

作品の殆どは徳島の鳴門海峡の砂でタイルの製造からはじまった「大塚オーミ陶業株式会社」が製作した。当初は滋賀県信楽町の「近江化学陶器株式会社」で、大塚製菓との間で「大塚オーミ陶業株式会社」という会社になった。この陶板製作の工場が我が滋賀県信楽にあるということがうれしいのである。

2千年以上退色劣化しない美術品

大塚オーミ陶業株式会社が開発した特殊技術によって、世界中の名画を陶器の板に原寸で焼き付けた陶板名画は約2千年以上にわたってそのままの色と姿で残るという。かつて、中国の景德鎮や日本の有田焼を積んだオランダ商船がヨーロッパと交易していたとき、途中嵐に遭ってインド洋に沈没した船の荷を、数百年後に引き揚げたところ、陶磁器類は昔のままの色と姿で残っていたという。その時代の陶器は1000度ぐらいで焼いていたというから、現代1300度でしかも最新の専用特殊技術で焼くのなら、千年も2千年もそのままの姿で残るに違いないという。

未来へ美術品を永く伝えるメディアについて、何が適しているだろうか？。たとえば、写真を考えてみよう。今の紙、フィルムはもちろんのこと、デジタルデータによる画像など、将来にわたって保存し続けられるだろうか。現在のデジタルデータはメディアに劣化せず残せるのは最高でも10年といわれている。しかも、これらのデジタルデータは何らかの電氣的技術無しには再生できないのである。このように考えると、非常に精緻な技術で画像を焼き付けた陶板は最も有効なメディアではないだろうか。

大塚オーミ陶業株式会社信楽工場を訪問

このすばらしい技術を実現している工場を見たいという衝動から、大塚オーミ陶業信楽工場を平成22年12月に訪問した。営業の富増氏、工場長の的場氏にお会いし、ショールームで陶板美術について、豊富な展示作品を見ながら非常に興味深い説明を聞いた。陶板の厚さを実際に触れてみて実感。湾曲した美術品をどのように陶板で再現す

るのかの非常な苦勞も納得できた。ショールームには日本の国宝の絵巻や著名な画家の名作が復元展示されている。写真技術だから、原寸はもとより、縮小も拡大も自由。小さい美術品を鑑賞しやすいように拡大して制作することも可能だ。超精密な写真撮影、フィルムから色分解、特殊技術で陶板に定着させ、レタッチは手作業で更に細かい微妙な色などの調整、表面の凹凸の再現などのあと、それを焼成となる。名画、肖像写真の他に立体彫刻さえもレプリカが可能である。

原画の忠実な再現のために、転写技術、釉薬の研究、焼成技術、そしてレタッチ技量など、多くの試行錯誤と時間があつたと思う。

～美術陶板の制作工程～

「原画→色分解→転写紙印刷→陶板に転写→焼成→レタッチ→焼成→検品→陶板名画」

同社の商品として、美術品の陶板制作はセラモアートという商品であるが、一般商品として、ビル外装のテラコッタ（国会議事堂の中央棟屋根など）、CAB（セラミックアートボード）、サイン陶板（観光地の案内板など）がある。



大塚オーミ陶業株式会社信楽工場



工場長の的場氏と

陶芸の世界では、原音に極めて忠実な低音を実現できる陶器スピーカー、保温断熱材の石綿糸の代替の陶器繊維、上絵付焼成による抗菌陶磁器、光が透ける陶器、電気伝導性陶器などなど非常に多くの産業文化向けの実用研究が進められている。

分野は違っても、いつか、このような仕事になんらかの形で携わってみたいと思う。

レイカディア大学に感謝

高校卒業後、45年にして憧れの「大学」に入学、陶芸をはじめ、いろいろな勉強をさせていただき感謝です。還暦過ぎでの同級生、陶芸32の仲間は非常に仲が良く、生涯の友として今後も我々の幸運としたい。これからも陶芸を趣味の一つとして楽しみたいと思いますが、レイカディア大学の目的である地域活動奉仕を常に念頭に過ごしていきたいと思っています。

楽しい学生生活とみなさんの友情に、感謝。本当にありがとうございました。